

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21711

研究課題名（和文）会計制度設計の革新

研究課題名（英文）Innovation of design for accounting regulation

研究代表者

山本 達司（Tatsushi, Yamamoto）

同志社大学・商学部・教授

研究者番号：80191419

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：これまでの会計制度設計は、粉飾決算が発覚するとともに、より厳しい規制を課するという方法で進められてきた。しかし今日でも、会計不正が起こっている。このような制度設計失敗の原因は、「人はなぜ嘘をつくか」という心理的な問題を考慮しなかったためである。本研究では、人が嘘をつくメカニズムとその防止方法について、理論的仮説を導き、それを実験室実験によって検証した。その結果、次の2つの発見が得られた。人々は最初は小さな嘘をつき、それがエスカレートし、大きな嘘となる。企業内の虚偽報告を防止するためには、虚偽と判断する基準を過度に厳格にせず、明らかな虚偽報告のみを受け入れないというシステムが優れている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主たる貢献は次の2点である。第一に、最初は小さな嘘であっても、人は嘘をつく機会が繰り返し与えられていると、嘘がエスカレートし、結果的には大きな粉飾決算を招く可能性があることを明らかにした。会計学研究において、人が嘘をつく心理的メカニズムから会計不正の防止を提言した研究は少なく、本研究は会計学における粉飾決算防止研究に貢献している。第二に、企業内の虚偽報告を防止するためには、虚偽と判断する基準を過度に厳格にせず、明確な虚偽報告のみを受け入れないというシステムが優れていることを明らかにした。つまり、より安価なシステムが、より優れている可能性を示唆している。このことの実務的意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：The design of accounting systems to date has proceeded in such a way that as window dressing is uncovered, more stringent regulations are imposed. However, accounting fraud still occurs today. The reason for this institutional design failure is that it did not take into account the psychological issue of why people lie. In this study, we derived a theoretical hypothesis about the mechanism by which people lie and how to prevent it, and tested it through laboratory experiments. As a result, the following two findings were obtained. People tell small lies at first, which escalate and become big lies. To prevent false reports within a company, a system that is not overly strict in its criteria for judging falsehoods and only rejects obvious false reports is superior.

研究分野：財務会計

キーワード：会計不正 経済実験 財務会計

## 1. 研究開始当初の背景

会計情報は社会に不可欠な経済的インフラである。企業が開示する会計情報は、様々な利害関係者によって利用される。企業外部者に注目すると、投資家は投資意思決定に、銀行は融資意思決定に、税務機関は課税所得の計算に、会計情報を利用する。政府機関は、会計情報の集約データを用いて政策を立案する。一方、企業内部者に注目すると、会社法は、経営者に配当制限条項、純資産維持条項を課することによって、債権者を保護している。このように多くの契約が会計情報を媒介として締結され、多くの意思決定が会計情報に基づいて行われている現状を考えると、もし会計制度が公正な会計数値を作り出せないなら、社会における多くの契約は不効率となり、多くの誤った経済的意思決定が行われることになる。つまり、公正な会計数値は、人々を幸せにする重要な経済資源であると言える。

法律、条例等の社会制度は、構成員の社会的厚生を高めるために制定されるが、必ずしも、制度の意図が実現されるとはかぎらない。2000年の会計ビッグ・バンでは会計制度の大改革が行われ、それ以降も金融商品取引法、会社法ならびに関連諸規定が、繰り返し改正されているにもかかわらず、企業による会計不正は一向に後を絶たない。それどころか、企業と監査法人が一体となって会計不正を行うなど、会計不正の手段がより巧妙化している。昨今に発覚した東芝の会計不正は、その典型である。これは明らかに、会計制度の失敗である。このような状況が続くと、会計情報が社会に不可欠な経済的インフラとしての役割を果たせず、社会全体の厚生が低くなる可能性がある。

## 2. 研究の目的

上記「1. 研究開始当初の背景」のような問題意識に基づいて、本研究の目的は、企業に公正な会計数値を開示させるためには、どのような会計制度の設計方法が望ましいかを明らかにし、それを会計規制設定機関に提言することである。

## 3. 研究の方法

近年、会計制度の失敗が顕在化している。これまで大きな会計不正が発覚するたびに、会計制度が改正されてきた。しかし、現代においても会計不正はいまだに存在する。ここで「これまでの会計制度改革のアプローチが正しかったのか」という根本的な問題の検討が必要である。これまでのアプローチの特徴は、次の2点に要約される。

厳格な会計手続を求めることによって、会計数値の信頼性を高める。

問題が発覚すれば、後追的に会計制度の改正を行う。

これらのアプローチが失敗した原因は、第一に、会計規制設定機関が会計手続の厳格化にのみ着目し、会計数値を作成する人間の心理という視点を欠いていたことである。実際に会計数値を作成するのは人間であるから、人間行動の観察なくして、効果的な会計規制はありえない。第二に、「会計数値を作成する経営者と利害関係者が、経済の中でプレイヤーとしてどのように行動するかを事前に予測し、社会を幸せにする会計制度を構築する」という発想が欠落していたことである。

このような観点から本研究では、行動ゲーム理論に基づいて、プレイヤーの心理とプレイヤー間の相互作用を考慮して、経営者に公正な会計数値を作成させるためのインセンティブ設計を行う。そして、この理論モデルを経済実験により検証する。

## 4. 研究成果

本研究プロジェクトの成果は、次の2つに要約される。

### (1) 嘘のエスカレーション・メカニズムの解明

不正会計については、最初は小さな不正が時間とともに大きくなって、最終的には巨大な粉飾決算となると言われている。粉飾決算の社会的影響は甚大であるにもかかわらず、小さな不正がどのようにして大きな不正へと変容するのかについては、解明されていない。また、その防止方法についても、研究の蓄積が少ない。そこで本研究では先行研究を検討することにより、2つの仮説を設定し、その検証を行った。

#### ○第一の仮説：lying aversion hypothesis

人々は嘘をつくことを避ける傾向があり、とりわけその嘘から他人が大きな損害を受ける可能性がある時に、その傾向は顕著である。

#### ○第二の仮説：lying escalation hypothesis

人々は最初は小さな嘘をつき、それがエスカレートし、結果的に他人がそれによって大きな損害を受けようとも、嘘をつき続ける。

実験室実験の結果、lying escalation hypothesis を支持する結果が得られた。この発見は、

人間の嘘つき行動とその心理的メカニズムについての研究に、1つの新たな知見を提供している。

## (2) 逆淘汰防止のための経営管理ツールの構築に向けての提言

本研究では予算スラック問題に着目して、従業員による逆淘汰を防止するために、従業員に対する業績評価・報酬システムに代わる新たな手段として、企業内環境観察システムの有効性について検討した。まず、予算スラックについての Hannan et al. (2006) のモデルに管理者の拒否権を導入した設定において、プレイヤーが合理的経済人であると仮定して、「従業員は想定される最大のコストを報告し、管理者はそれを受諾する」という仮説を提示した。そして、この仮説を経済実験によって検証した結果、従業員はコストの上限を報告せず、管理者は必ずしもそれを受諾しなかった。このことは、合理的経済人を仮定した契約理論の予測の限界を示唆している。

そこで本研究では、何が従業員の報告コストに影響を与えているのかを考察するために、情報システムが発するシグナルの精粗に着目し、粗雑なシグナルを発するシステムと精緻なシグナルを発するシステムの比較検討を行った。その結果、粗雑なシグナルを発するシステムにおいて、シグナルの精粗が従業員による報告コストの選択に強く影響し、シグナルの上限を超える報告コストに対して、管理者が拒否する傾向がより強いことが判明した。これが本研究の結論である。

本研究の貢献は、次の2点にある。学術的には、予算スラックについての Hannan et al. (2006) のモデルに管理者の拒否権を導入することによって、より一般化した状況でも、粗雑なシグナルを発するシステムが、経営管理ツールとしてより有用である可能性を示したことである。実務的には、より安価なシステムが、経営管理ツールとしてより優れている可能性を示唆している。このことの管理会計的意義は、大きいと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 山本達司・田口聡志・三輪一統	4. 巻 12(2)
2. 論文標題 粗雑なシグナルか、精緻なシグナルか？ - 逆淘汰防止のための経営管理ツールの構築に向けて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 メルコ管理会計研究	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志	4. 巻 72(4)
2. 論文標題 VUCA 社会で紡ぐ証券市場と企業組織の Tech x 信頼：実験社会科学研究に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 61-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本達司	4. 巻 71(5)
2. 論文標題 ビットコインの潜在的リスク	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 115-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志	4. 巻 71(3)
2. 論文標題 複式簿記の特質に係る行動経済学的分析：AI時代の会計利益の「危機」を巡って	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 38-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志	4. 巻 71(5)
2. 論文標題 AI時代の会計・監査に係る実証研究の位置づけに係る再整理：「会計に求められる新たな教養」を見据えて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 221-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂上 学・田口 聡志、上枝 正幸・ 廣瀬 喜貴	4. 巻 17
2. 論文標題 実験会計研究の未来	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イノベーション・マネジメント	6. 最初と最後の頁 21-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三輪一統	4. 巻 71(12)
2. 論文標題 (Salon de Critique) 目は口ほどに物を言う アイ・トラッキング研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 企業会計	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Taguchi, Kazunari Miwa, and Tatsushi Yamamoto	4. 巻 22-02
2. 論文標題 The Effect of Escalating Lies on Business Ethics: An Experimental Study of the Repeated Deception Game	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Doshisha University ITEC Working Paper series	6. 最初と最後の頁 1-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yusuke Sawada, and Satoshi Taguchi	4. 巻 22-01
2. 論文標題 Unintended Consequences of Budget Participation and Performance Reporting: An Experimental Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Doshisha University ITEC Working Paper	6. 最初と最後の頁 1-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoshi Taguchi, Yusuke Sawada, Yoshitaka Hirose	4. 巻 73(3)
2. 論文標題 An Experimental Study on Potential Whistleblowing Intentions in conspiracy: A Dilemma of Fairness and the Risk of Reporting	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 29-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志・永田大貴・磯川雄大	4. 巻 18
2. 論文標題 Tech×会計×信頼研究が切り拓く会計の未来	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Disclosure & IR	6. 最初と最後の頁 72-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志・椎葉淳・三輪一統・村上裕太郎	4. 巻 73(1)
2. 論文標題 会計情報と報酬契約の関係を巡る理論と実験の乖離：説明の根拠を巡って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 63-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田口聡志	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 Tech時代の価値創造と会計 -会計利益の本来的な役立ちを巡って	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 企業会計	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 澤田雄介・田口聡志
2. 発表標題 予算参加と業績報告行動 - 心理要因に焦点を当てたオンライン実験研究 -
3. 学会等名 日本管理会計研究学会年次全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yusuke Sawada, Yoshitaka Hirose, Satoshi Taguchi
2. 発表標題 An Experimental Study on Potential Whistleblowing Intentions: A Dilemma of Fairness and the Risk of Reporting.
3. 学会等名 2019 American Accounting Association Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口聡志
2. 発表標題 AI監査と不正の多様性：監査人の責任に係る経済実験
3. 学会等名 日本会計研究学会第78回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口聡志
2. 発表標題 Disclosure is a gift that encourages trust and reciprocity
3. 学会等名 日本経営分析学会・日本ディスクロージャー研究学会第36回年次大会2019（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口聡志
2. 発表標題 実験会計学の新たな可能性を巡って：これまでとこれから
3. 学会等名 日本経営分析学会・日本ディスクロージャー研究学会第36回年次大会2019（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本達司
2. 発表標題 ビットコインとブロックチェーン - 会計的側面からの検討 -
3. 学会等名 同志社会計人会冬季研修会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yusuke Sawada and Satoshi Taguchi
2. 発表標題 Unintended Consequences of Budget Participation and Performance Reporting: An Experimental Study
3. 学会等名 2022 American Accounting Association Management Accounting Section Virtual Midyear Meeting（国際学会）
4. 発表年 2022年



〔図書〕 計2件

1. 著者名 田口聡志	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 240
3. 書名 教養の会計学：ゲーム理論と実験で考える	

1. 著者名 太田康広・村上裕太郎・三輪一統・木村太一・西谷順平・廣瀬喜貴・松田康弘・若林利明・黄耀偉・濱村純平	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央経済社	5. 総ページ数 20
3. 書名 人事評価の会計学 キャリア・コンサーンと相対的業績評価	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	三輪 一統  (Miwa Kazunori)  (00748296)	大阪大学・経済学研究科・准教授   (14401)	
研究分担者	田口 聡志  (Taguchi Satoshi)  (70338234)	同志社大学・商学部・教授   (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------